

## 《瀬戸茶入 銘 八重垣》（江戸時代・17世紀） 付属の仕覆について

共立女子大学 長 崎 巖

### はじめに

木村定三コレクションに含まれる古瀬戸茶入「八重垣」には、仕覆と牙蓋がそれぞれ8つずつ付属している。「八重垣」は片桐家伝来の茶入で、いつの時期にか肥前松浦家に移り、昭和9年11月の松浦家の売り立てに姿を現している。その後の経緯は不明ながら、後に木村定三氏の所有となり、他の美術品とともに2003年に愛知県美術館の所蔵となったものである。

本稿は、この「八重垣」に付属する仕覆の染織品としての内容と特徴につき、調査を通じて明らかになったことを記すとともに、その制作年代について考察を行うものであるが、その前に、茶道における裂の価値観の成立過程を概観し、茶道一般において仕覆裂に吟味された裂地が使用されるようになった経緯を振り返る。

### 仕覆裂と「名物裂」

仕覆は、茶入や薄茶器、茶碗、挽家などの茶道具類を入れる袋で、「仕服」とも記すが、これが茶道の歴史の中で他の道具類に準じて関心を持たれるようになったのは、さほど古いことではない。

茶道における様々な裂地の位置づけは、時間的な経過の中で変化してきた。それは「名物裂」として現在認識されている裂類が、茶道の中で一つの地位を与えられる道筋でもあった。ここで「名物裂」の概念と価値観の成立の過程を概観してみたい。それは仕覆裂に関心がもたれるようになる歴史と重なるものであり、そこに価値観が生じることにより、一つの茶入に複数の仕覆が用意されるという現象を生み出したと考えられるからである。仕覆裂に茶器類の保存以外の目的がなかったならば、傷んだ時点で新しい仕覆に交換され、古いものは破棄されたはずである。「八重垣」には8点の仕覆が添えられているが、替え蓋の持つ意味にはほぼ等しい価値観が仕覆裂にも生じて、替え仕覆が用意されるようになったのであろう。

### 「名物裂」の概念と価値観の成立過程

茶道が確立し、これに用いる道具が鑑賞の対象となるのは南北朝頃であるが、この頃はまだ人々の関心は絵そのものや茶碗・茶入そのものにあって、これらを装飾し包む裂類にはほとんど関心が払われていなかったと考えられる。従って絵画・道具類についての記載に裂の記述が付帯することはなかったが、東京国立博物館本『君台観左右帳記』（大永3年〈1523〉

宗珠の奥書あり）の「唐物之名」の項の最後に、「金襴」「金紗」「紋紗」「金羅」「印金」「縹子」「段子」「綾羅」「錦繡」などが列挙されており、これらの裂類が舶来の染織品として認識されていたことが窺われる。

桃山時代から江戸時代初期の茶会記にも、例えば『宗達茶湯日記』（天文17年〈1548〉～永禄9年〈1566〉）や『宗久茶湯日記』（永禄9年〈1566〉～天正13年〈1585〉）などには、袋の説明に「金襴」や「緞子」「問道」などの名が見られるほか、『久政茶会記』（天文11年〈1542〉～天正16年〈1588〉）には、「鳥襷」「唐草」「唐花」「格子」「榭龍」といった具体的な模様の説明が見られるようになる。

しかし『久好茶会記』になると、慶長14年〈1609〉12月12日の条に「珠光緞子」の名が見え、また『久重茶会記』では、寛永6年〈1629〉6月14日の条に「袋モヨキシユス（萌黄縹子）地文ツルノ（鶴の）丸金森か雲州メサレ候御袋ト也」、正保5年〈1648〉2月8日の条に「袋 舟越三郎四郎コノミ」とあるように、単に裂の種類や模様だけでなく、特定の裂についてその裂の由来を記したものが現れる。

こうして裂そのものへの関心が次第に高まっていき、元禄頃には現在われわれが名物裂と呼んでいる裂類が、一つのジャンルあるいはグループとして認識され、それぞれに固有の名称を付ける傾向が強まっていったと推測される。元禄4年〈1691〉の『鴻池家道具帳』には、「大燈袈裟切」（大燈金襴）、「嵯峨帳切」（嵯峨裂・大内桐金襴）、「安楽庵切」（安楽庵金襴）、「白極」（白極緞子）、「ささつる」（笹蔓緞子）、「有楽」（有楽緞子）などの名が見える。

また元禄7年〈1694〉に刊行された『万宝全書』中の1巻「古今和漢諸道具見知鈔」には、「古今時代端（裂）之色々」という項があり、まず「時代裂」を定義して「東山殿時代よりひさしきものをさす渡りの古き物也」とし、そののち「大内桐 袋端 名物金襴桐小文様アリ、口伝」「白極切 袋端 名物の唐段子也」というようにと、60種あまりの裂を列挙している。ここにおいては、後に名物裂として共通認識される各裂が「時代裂」と呼ばれるとともに、これらの裂に対して「名物」という言葉の使用も始まっている。

そしてこれらの裂類をついに「名物裂」の名のもとに集大成したのが、松平不昧の『古今名物類聚』（寛政3年〈1791〉～9年）の「名物切之部」2巻である。そこには166点、106種の裂が収録され、うち金襴は79点、49種、緞子は38点、29種、問道は23点14種、その他は26点、14種を占める。

これらは、松平不昧が個人的に選定したというよりも、むしろ寛政初年頃までにすでに名物裂として広く認識されていた裂を整理したものといえよう。本書以降に刊行された名物裂関係の書がいずれもこれに準拠していることは、それを示すものである。文化元年〈1804〉に刊行された『和漢錦繡一覽』には、名物裂342種が収載されており、詳しい名称と年代考証がなされている。以後現代に至るまで、これら江戸時代の文献に記載された裂類を名物裂と呼んだり、これらを中心に、これに類似したものや同時期の舶来染織品を加えて名物裂と呼んだりすることが行われている。

ちなみに「石州茶会記」には、寛永21年〈1644〉2月16日晚、同4月21日朝、同10月26

朝晩、正保2年（1645）正月19日晚、同正月21日の茶会に「八重垣」が使われているが、仕覆については、染織品としての種類や具体的な名称は記載されていない。

しかし『石州三百ヶ条』に「昔ハ唐物にハ古金襴、和物にハかんとう・純子の類を用、利休より布（却）而唐物などに袋をかるく、かんとう・純子のたくひを用、和物などハ古金襴の類を用ひて袋をおもくする也」とあり、茶入の種類に応じたふさわしい仕覆の生地の種類を指示している。このことから、江戸時代前期においては、前述のとおり、茶入の仕覆を含め、茶で用いる裂地に対しては、染織品としての裂の種類には大いに関心は持っているが、模様についてはようやく関心を持ち始めた時期であったと推測される。

『石州三百ヶ条』は片桐石州の門弟たちによって整えられたものと考えられているが、その内容は石州存命時代に実際に行われていたものであろうとされており、前記の状況が17世紀半ば頃の茶道における裂の位置づけであるといえよう。

## 茶入と仕覆

「茶入」とは、広義には抹茶を入れるのに用いる茶器全体を指し、狭義には棗に代表される木製茶器（薄茶器）に対する陶磁器製のものを指す。古くは茶壺を「大壺」と呼んだことに対して「小壺」と呼ばれ、また「葉茶壺」に対して抹茶を入れる容器として「挿茶壺」とも呼ばれた。現在では濃茶を入れる容器として特に「濃茶器」とも呼ばれる。元々は薬味・香料などを使用して使用されていた容器を転用して、伝来当時非常に貴重品であった茶を入れたものと考えられている。

江戸時代初期までの茶人にとっては、茶入は一国一城に匹敵する程の価値を持つ貴重なものであり、自らの家柄や人格をも象徴するとさえ考えられていたようである。小器でありながら陶磁器として美術品として多様な鑑賞方法を背後に内包しているともいえ、それがながら茶入が茶碗とともに貴重視されてきた所以であろう。

蓋は茶入にとって本体に劣らず重要なもので、茶が湿るのを防いだり、異物が混入することを防ぐことを本来の目的としているのは言うまでもないが、やがて茶入がその姿の美しさを重視されるようになると、蓋には牙蓋がもっぱら使用されるようになった。象牙のもつやわらかい色彩と質感が茶入に優美な美しさをもたらすからである。

特に利休時代以後、大名茶人達はきそって蓋に凝った。茶入は牙蓋により雰囲気は千変万化の姿を見せるが、数奇者たちは、己が好みの牙蓋とともに、これと調和して茶入に更なる美しさを加えてくれる仕覆を自ら詠えた。それゆえ、生地を吟味し、好みに合わせて仕立てられた仕覆には、所有者の美意識が強く反映されているといえる。

## 「八重垣」付属仕覆裂の内容

下記の8点に与えられた括弧内の英数字は、愛知県美術館でそれぞれの仕覆につけられた仮番号、時代は仕覆に使用されている裂の製織年代である。

## （1）白地小石畳七宝模様緞子仕覆（図録名称：伊予簾） 16-17世紀

経糸に縹・水浅葱・茶・薄茶・白・萌黄、緯糸に茶の無撚糸を用いた緞子。伊予簾緞子。ツガリ濃紫。墨流しの付け札に「桑山左近好」と墨書する。

伊予簾は、小堀遠州所蔵『遠州御蔵元帳』に「伊予すたれ 一せい二寸貳部 一卷、すそ一寸九分 一口九分二厘（略）」と記される古瀬戸尻彫茶入であり、松平不昧の『古今名物類聚』「名物切之部」に「こいしたゝみ 伊予簾の袋にかけたる故 後いよすたれと称す」とあることから、この裂の名が、これに包まれていた茶入の名に由来することがわかる。また、同じくこの記述から、小石畳緞子という別称が、裂の模様に基づくものであることもわかる。

伊予簾緞子には金糸を織り込んだものと、織り込まないものがあり、本歌と言われる「古瀬戸尻彫茶入 銘 伊予簾」（昭和美術館）の仕覆は後者、「唐物肩衝茶入 銘 安国寺」（五島美術館）の仕覆は前者であるが、「八重垣」に付属するものもまた後者である。

これらの茶入に付属する伊予簾は、東京国立博物館所蔵の加賀前田家伝来の伊予簾緞子（裂）とともに、先行研究によって16-17世紀とされており、織組織はいずれも五枚縹子地である。「八重垣」に付属する伊予簾も五枚縹子地であることから、他の2例と同時代の作と判断され、早い時期から茶入に伴っていたものと推測される。風合いは伊予簾の仕覆に最も近い。

但し、意匠に関しては縦縞の配列は上記のいずれの裂も異なり、また糸の太さもそれぞれ少しずつ異なることから、これらと同じ裂から切り出されたものはないと考えられる。

墨書に記された「桑山左近」は、戦国時代から江戸時代前期にかけての武将で茶人である桑山貞晴くわやまさだはると考えられる。

貞晴は桑山重晴の三男。永禄3年（1560）に生まれ、寛永9年（1632）に没した。片桐石州は貞晴の門下生にあたる。貞晴ははじめ豊臣秀長に仕え、大和国内に2500石を与えられた。秀長死後は豊臣秀吉、次いで徳川氏に仕えた。茶の湯を千道安に学び、すぐれた技量をそなえていたと伝えられる。片桐石州を門人にもち、のちの武家の茶の湯に大きな影響を与えた。

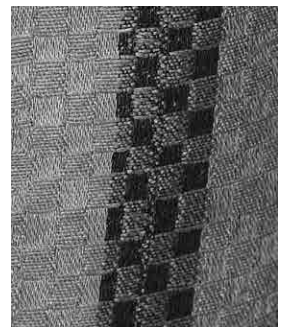


仕覆1

## （2）縦縞花模様間道仕覆（図録名称：権太夫間道） 17世紀

〈1〉茶地縦縞模様間道と〈2〉白地縦縞模様間道、〈3〉白地花模様錦の3枚の裂を縫い合わせて仕立てている。

〈1〉茶地縦縞模様間道は、経糸に茶・紺、緯糸に濃茶を用いて縦縞模様を表す。〈2〉白地縦縞花模様間道は、経糸に白・縹・紅・鶺鴒色、緯糸に縹・白・桃色の糸を用い、縦縞の中に微妙な色合いで格子模様も表わしている。〈3〉白地花模様錦は、経糸に白、緯糸に浅葱・縹・平金糸を用い、花を浮織に表す。



仕覆1組織

墨流しの付け札に「桑山左近好」と墨書する。ツガリ濃紫。問道は広東・漢東などとも記され、縞及び格子模様の織物をいう。絹製のものと木綿製のものがあり、前者は中国からもたらされ、後者は琉球貿易や南蛮貿易を通じてインドや東南アジアの諸国からもたらされた。

中国明代においては、雲南・四川・広東地方が縞織物の産地として知られており、これらの地方からは、通常の縞のほか、浮き糸を帯状に織り込んで紐のように見せるものや、金糸を織り込んで模様を表わすものなど、様々なバリエーションが生み出されている。

一方、インドやインドネシア・ベトナム方面からは、地方ごとに縞の太さや配色に特徴のある木綿縞が多数もたらされた。中国の絹問道に茶人を暗示するような名称を持つものが多いのに対し、木綿の問道には さんとめ・セントトーマス 棧留縞・べんがら・ベンガル 辨柄縞など産地名を名称としたものが多い。

この仕覆に用いられている2点の問道裂は、ともに絹製であり、中国で17世紀頃に制作されたと考えられる。また、浮織錦もこれらと同時期と考えられ、仕覆が仕立てられたのもその時期であろう。

### (3) 浅葱地立木麒麟波模様錦仕覆 (図録名称：上代縞)

#### 16-17世紀

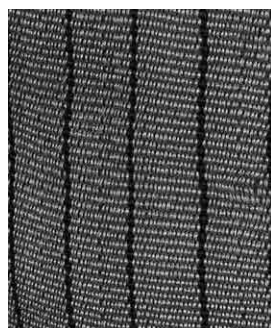
経糸浅葱、緯糸、浅葱・白・鶺鴒色・平金糸。ツガリ濃紫。墨流しの付け札に「小堀遠州好」と墨書する。

裏面を確認できないが、平地に絵緯を繻い取り風に織り込んでいると考えられる。また経糸が細く、地緯は太い糸（数本の引きそろえか）と細い糸を交互に織り込んでいる。織組織は複雑で、経糸は母経おもだてというべき2本引き揃えの経糸と陰経ともいえる1本の経糸からなり、これらがそれぞれ1本の経糸のように、太い緯糸と細い緯糸と交互に交差して平織地を作りながら、これに色緯を繻い取り風に織り入れて模様を表す。

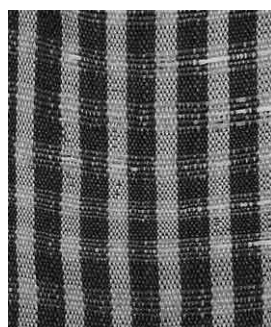
名物裂の錦には有栖川錦と呼ばれるものがあり、織組織としてはこの仕覆裂に幾分近いが、意匠は異なる。模様の雰囲気はむしろ前田家伝来の麒麟吉祥文字段模様風通（京都国立博物館蔵）に近い。もとより織組織はまったく異なるが、雲と麒麟の表現に類似性が認められる。



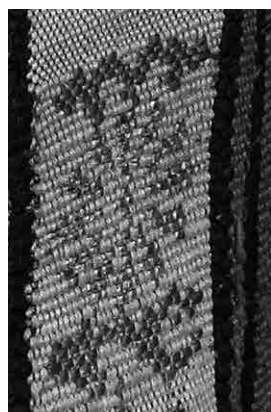
仕覆 2



仕覆 2 組織 1



仕覆 2 組織 2



仕覆 2 組織 3

また岐阜県関市・春日神社蔵・紅地獣花模様黄緞狩衣（重要文化財）にもこの仕覆裂に類似した表現の雲と獅子の模様が見られる。獅子は表現に仕覆裂の麒麟に近い雰囲気醸しており、雲模様は下部が直線で繋がり、雲と雲の間に小さな山形を配している点が共通している。

先行研究において上記の風通裂の制作年代は16世紀から17世紀、船載の黄緞裂で仕立てた狩衣の制作年代は室町から桃山時代・16世紀と考えられており、これらと一部共通する特徴を示すこの仕覆は、16世紀から17世紀頃に製織されたものと推測される。

錦は、二色以上の経糸または緯糸の浮沈で模様を織り出した織物の総称で、その言葉の含む範囲はかなり広い。中国では漢代にすでに錦が織られ、わが国へは飛鳥・奈良時代に伝来し、技術もほぼ同時に移入されて、国産化も進んでいた。平安時代・鎌倉時代を通じて、技法・模様ともに和様化した錦が国内で生産されていたが、室町時代を中心とする第二回目の本格的な中国文物の流入期にあたり、中国産の錦が再びもたらされることとなった。

当時中国からもたらされた錦は、国産のそれと全く趣を異にしており、それ故にこれが舶来品としてもはやされ、茶の裂地として用いられたものと思われる。

### (4) 紅地唐花唐草横縞模様錦 (モール) 仕覆

#### (図録名称：燃金モール) 16-17世紀

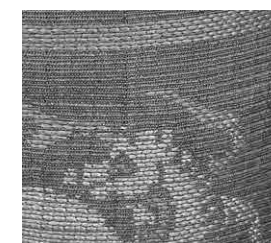
経糸紅、緯糸、紅・浅葱・白・鶺鴒色・紺・燃金糸（萌黄の芯糸に平金糸を巻きつけてある）。仕覆はこの生地を横使っている。

経糸2本ずつを一つの箴羽に通した羽二重経で平地に織りながら、色緯と燃金糸のモール糸を織り込んだ平地の浮織錦である。縞地は地緯の色を替え、唐花模様は色緯糸の浮織、唐草模様はモール糸の浮織で表す。

絹糸の芯に平金糸または平銀糸をコイル状に巻き付けて作った燃金糸や燃銀糸を織り込んだ織物をモールといい、江戸時代には莫臥爾・回々織・毛字留などと表記した。16世紀インドのムガル王朝時代に盛んに製織されたこの種の裂が、わが国にもたらされた際、ムガルがモールに転訛したといわれている。



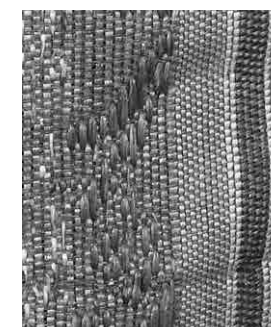
仕覆 3



仕覆 3 組織



仕覆 4



仕覆 4 組織

模様は、横段を表したのものや、横段の間に花文などの模様を配したものが多く見られるが、この仕覆にもそうした特徴が認められる。

撚糸糸がもたらす独特の質感に加えて、一層異国的な印象を醸し出す点が好まれ、おもに茶の裂地に用いられた。日本国内に伝存している代表的なモールの多くは16-17世紀の制作とされており、この仕覆裂もほぼ同様の時期に制作されたと推測される。

ツガリ濃萌黄。墨流しの付け札に「佐久間□□好」と墨書する。

#### (5) 紺地波模様銀欄仕覆 (図録名称：古銀欄) 16-17世紀

経糸紺、緯糸、紺・平銀糸を用いて織られた縹子地銀欄。地緯を絵緯1本おきに入れる。模様は青海波を簡略にしたような波模様。15-16世紀の作とされる本能寺緞子の地文にこの仕覆の波模様に幾分類似した模様が見られるが、仕覆裂に見られる波模様のほうがやや硬く、製織された年代は本能寺緞子よりもやや下がり、16-17世紀と考えたい。

ツガリ紫。墨流しの付け札に「金森出雲好」と墨書する。

#### (6) 白地横段模様平絹仕覆 (図録名称：古代段織錦)

##### 17世紀

経糸薄紫、緯糸、白・紫・黄・薄黄・浅葱・萌黄・薄紫。緯糸は撚のかかった糸を2本引きそろえるが、経糸は無撚。

ツガリ浅葱。墨流しの付け札に「金森出雲好」と墨書する。

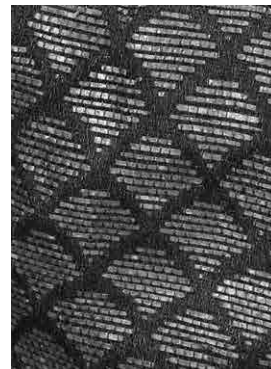
模様は細めの横縞であるが、縞に使用されている色と生地質感は相良間道に類似する。相良間道は縞の間に唐草その他の模様を浮織で表すが、「八重垣」に付属するこの仕覆裂は縞のみである。

『古今名物類聚』に見える相良間道は、縹・萌黄・黄・白の細縞の間に赤地に黄の唐草文を配する。相良間道の名称の由来は明らかでないが、地名または人名の「相良」と何らかのかかわりがあると考えられている。

相良間道、及びこれと類似した薩摩間道は、ともに17世紀に東南アジア地方で製織されたと考えられており、この仕覆裂も17世紀の製作になるものと推測される。



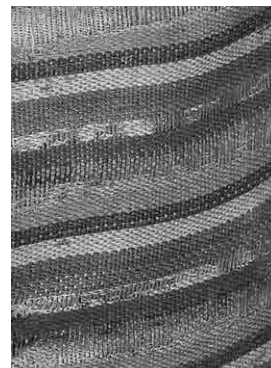
仕覆5



仕覆5組織



仕覆6



仕覆6組織

#### (7) 浅葱地牡丹唐草模様金欄仕覆 (図録名称：東山古金欄)

##### 17-18世紀

経糸浅葱、緯糸、浅葱・平金糸を用いて織られた縹子地金欄。ツガリ赤紫。墨流しの付け札に「石州好」と墨書する。

振り返った葉を付けて翻転する一重蔓に牡丹様の花とともに、椿様の花と菊様の花をつけている点で、京都国立博物館蔵、加賀前田家伝来の東山金欄に類似している。前田家伝来の東山金欄においては、牡丹様の花が他の二種の花に比して大きく表されているが、この仕覆裂においては、牡丹様の花と他の二種の花がほぼ同じ大きさに表されている。

舶載された唐草模様金欄の多くは牡丹唐草であり、それらのほとんどが牡丹(実際には牡丹様の花)のみを蔓でつないだもの、もしくは牡丹を大きく表し、他の花を添える場合にはこれよりも小さく表すものである。この仕覆裂の模様は、牡丹唐草模様の中でも、そうした特徴が弱まっており、また個々の花の表現にも曖昧さが目立つ。

加えてこの仕覆裂の織組織は、縹子地の金欄である。金欄は、相対的に綾地のものが縹子地に先行すると考えられており、このことから同じく「東山金蘭」に分類することもできる仮番号(8)の仕覆裂に較べると時代は下がるものと考えられる。

#### (8) 紫地牡丹唐草模様金欄仕覆 (図録名称：紫地古金欄)

##### 15-16世紀

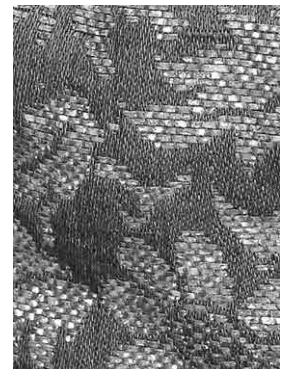
経糸紫、緯糸、水浅葱・平金糸を用いて織られた綾地金欄。ツガリ濃萌黄。墨流しの付け札に「石州好」と墨書する。

牡丹唐草は一重蔓に4種の花を配したもので、花の大きさや形、茎の太さや葉の形など、世に東山金欄と呼ばれているものに近い形状を示している。東山金蘭という名称は、「東山殿」と呼ばれた室町幕府八代将軍足利義政(1436-90)所用の裂に因んだものと言われるが、地色が異なり模様にやや違いがありながら、この名で呼ばれる裂がいくつかある。

「八重垣」に付属する紫地のこの仕覆も、模様の類似性からいえば東山金蘭に分類される可能性を含むが、『古今名物類聚』に「東山」と記され、松平不昧旧蔵の「切手鑑」に「東山金蘭」の付箋が貼られた裂は紺地であり、あえてここでは「紫地牡丹唐草模様金欄」としておくべきと考える。



仕覆7



仕覆7組織



仕覆8



仕覆8組織

また東山金襴と呼ばれるものには、綾地の金襴と縹子地の金襴があるとされるが、この仕覆に見られる織組織は、ともに15-16世紀の作とされる、前田家伝来紺地のもの（京都国立博物館蔵）、及び尾張徳川家徳川光友（1625-1700）のお譲り品と伝えられる萌黄地のもの（徳川美術館蔵）と同じく経三枚綾地別絡全越である。

一般的に金襴の織組織に関しては、綾地のものが縹子地に先行すると考えられており、これらも勘案すると、裂の制作年代は15-16世紀と判断できる。

## 考察

以上8点の仕覆について、その裂地の染織品としての内容と特徴の詳細を見てきた。裂の製織年代に関してはそれぞれが時代の幅を持ちながら、お互いに少しずつ異なる時期を想定した。しかし片桐石州の弟子清水道倫門下の山角四郎右衛門が「八重垣」を見た時の記録を、天明5年（1785）に清水道簡門下の仙石次左衛門から借用し、上村為山が書き写したものに、「片桐石見守貞昌候、御秘蔵、八重垣御茶入、御袋、蓋、八通左に記」として、8種の仕覆が記されている。仕覆の表地とツガリについては、下記のように記されている。なお、括弧内の漢数字は、この資料での記述順に従って仕覆に筆者が付けた仮の番号である。

- (一) 表 古今襴一重ツル地むらさき牡丹 スガリ 花色
- (二) 表 古銀襴萌黄 スガリ 紫
- (三) 表 伊予簾 スガリ むらさき
- (四) 表 鷗間道 スガリ むらさき
- (五) 表 銀襴 模様 如此 金らんの作と拝見へ申候 スガリ むらさき
- (六) 表 間道 スガリ むらさき
- (七) 表 縹間道 スガリ 濃浅黄
- (八) 表 より金は八目利ノ上にてはあしく スガリ 茶

これらの記述を仮番号ごとに前述の各仕覆の内容・特徴と照らし合わせると、それぞれ(一)は(8)、(二)は(7)、(三)は(1)、(四)は(3)、(五)は(5)、(六)は(2)、(七)は(6)、(八)は(4)に当たる可能性が高い。ただ、仮番号(四)のみは記述が簡略であるうえ、「鷗間道」がどのようなものを指しているか不明のため両者が合致する確証はない。

しかしそれでも、天明期にはすでにこの8点はともにあった可能性が高く、また8点に使用されている裂地の制作年代を通して観察すると、おおむね16世紀から17世紀を中心とする時期が共通項として浮かび上がる。特に17世紀に制作時期が想定されるものが多いことから、茶入が製作されて比較的早い時期にこれらの仕覆の多くが整えられたと考えてよいものと思われる。

1 《瀬戸茶入 銘 八重垣》と付属の仕覆 (本文P.20~28)



《瀬戸茶入 銘 八重垣》  
木村定三コレクション M1416



仕覆 1



仕覆 2



仕覆 3



仕覆 4



仕覆 5



仕覆 6



仕覆 7



仕覆 8